

事業実施報告

開催日	令和6年8月27日（火）～28日（水）		
事業名	全国高校生体験活動顕彰制度「地域探究プログラム」 オリエンテーション合宿		
開催場所	国立岩手山青少年交流の家	参加人数	27名
参加学校名等	岩手高校プログラミングコース		
関係機関名	岩手県教育委員会（後援） 岩手県障がい者スポーツ協会 岩手中央青果株式会社 岩手県立大学まちづくりサークル「えんぶらり。」 ふれあいランド岩手（展示） 岩手県立図書館（展示）		

状況報告 (事業の内容・事業の成果と課題について記載)

【事業の内容】

今年度も岩手高校プログラミングコース独自の宿泊行事「アイデアソン」の中で、オリエンテーション合宿のカリキュラムを実施した。今回の学校設定テーマは、岩手中央青果株式会社の提供による「パラスポーツを応援するために青果店ができることは？」である。ちょうど2024年がパラリンピック（パリ）開催年である適時性を活かせるとともに、企業活動の社会的責任とパラスポーツの現状について学べるテーマである一方で、生徒自身が自分の問題として捉えられるような工夫が求められる。そこで、テーマへの理解を深める体験活動とプログラムを提案し、「体験」と「交流」を軸としたサポートを行った結果、96.3%の生徒がプログラムに対して肯定的な回答を示した。その後、6グループすべてが探究活動の成果をまとめることができ、地方ステージに出場できた。

【成果】

○「体験」と「交流」を軸としたプログラムを提供できたこと

生徒たちがテーマと向き合い、解決アイデアを出すには、パラスポーツを体験することが一番だと考え、岩手県障がい者スポーツ協会と連携し、「パラスポーツ体験」を提供した。卓球バレー、ボッチャ、車いすバスケットボールを体験したことで、生徒たちはパラスポーツの魅力を体感できた様子で、感想には「パラスポーツのおもしろさを体験できた」との記述が多くあった。体験後にイメージマップ・疑問文づくりを行ったことで、テーマを自分事として捉え、意欲的に取り組む姿がみられた。感想にも「パラスポーツを楽しく体験でき、テーマについて考えやすい環境だった」との記述があり、「体験」と「交流」を軸としたプログラムの提供により、生徒の学習意欲を高めることに寄与できたと解する。

○生徒の実践活動につながるサポートができたこと

岩手県立大学まちづくりサークル「えんぶらり。」との交流場面を入れたことで、高校生からは「的確なアドバイスをもらえた」との感想が多かった。高校生と年齢が近い「ナナメの存在」である大学生からのアドバイスに加え、今回、探究学習を研究する文科省調査官の加藤智氏（愛知淑徳大学）や機構職員が視察に訪れ、それぞれの立場から実践の重要性を助言したこともあり、生徒たちは実践を意識した発表ができた。合宿を通じて出会った団体や人との関わりを活かし、障がい者スポーツ大会のボランティアに応募したグループ等があり、実践活動につながっていた。

県内社会福祉活動の中核施設「ふれあいランド岩手」や岩手県立図書館にパラスポーツ応援アイデア展示を提案したところ、展示の許諾をいただき、合宿の成果物を広く発信する機会を提供することができた。パネルをご覧になった方から実践活動につながるアイデアをいただくこともできた。

【課題】

●研修環境の一層の充実

今年度から宿泊室にエアコンを設置したことで寝苦しさはなくなり、研修環境が大幅に改善され、引率者からも好評であった。研修室にレンタルのスポットクーラー2基を用意し、熱中症対策を講じた。暑さが多少和らいだものの、効果は限定的であったため、研修室にも空調機器の設置が強く望まれる。

●生徒の実践活動を後押しするためのサポート

岩手高校プログラミングコースのカリキュラムや取組そのものが秀逸であり、当施設の役割は学校の取組をサポートすることである。今回、合宿での多様な人々との関わりがその後の実践活動につながったことを踏まえ、大学生団体等の活動事例、当施設の出前講座（ブース出展）等を紹介することで、生徒の実践活動をさらに後押しすることができる。適宜、情報提供等を行っていきたい。

状況写真



パラスポーツ体験

(講座担当:岩手県障がい者スポーツ協会)



グループで発想を広げる(イメージマップ)

(講座担当:テンパークスタッフ)



県立大「えんぶらり。」の発表・交流



ポスターセッション・講評

(講評:文科省調査官 加藤氏)



記念撮影

事業実施報告

開催日	令和6年10月22日（火）～10月24日（木） 2泊3日		
事業名	全国高校生体験活動顕彰制度「地域探究プログラム」 オリエンテーション合宿		
開催場所	国立岩手山青少年交流の家	参加人数	12名
参加学校名等	トライ式高等学院（広域通信制高校サポート校）		
関係機関名	岩手県教育委員会（後援） Earth Building IWATE		

状況報告 （事業の内容・事業の成果と課題について記載）

〔事業の内容〕

トライ式高等学院の「秋の林間学校」（2泊3日）の中で、オリエンテーション合宿のカリキュラムを実施した。自然体験を足がかりに環境、地域、歴史文化にふれながら、探究的な学びにつなげていくことをねらいとし、茅葺き職人の磯和亮治氏が案内役となって茅を取り巻く生態系等を実地で学ぶ「茅場さんぼ」、茅をつかった創作活動「茅ストロー」を行うことで、ファストフード店等で採用された紙ストロー（脱プラスチック製品）を想起し、持続可能な社会の在り方を考える機会を提供した。

本事業に対する参加生徒の反応は良く、事業全体に対する満足度は100%であったことに加え、地域の事物に対する興味関心が高まった旨の感想記述が多く見られたほか、講師の磯和氏（Earth Building IWATE代表）に茅利活用アイデアの提案や質問を積極的に行った生徒の姿も見られた。「現代家屋に曲り家の素材を活かす方法を考えてみたい」といった探究テーマとして十分に成立するものもあり、今回の体験プログラムがさまざまな事柄と結びつけて考える機会を提供し、生徒の探究的な学びにつなげることができたと考えます。

〔成果〕

○広域通信制高校を対象にオリエンテーション合宿を実施できたこと

昨年度、広域通信制高校でカリキュラムの一部を実施できた成果を活かし、通信制高校のニーズや特性に応じたオリエンテーション合宿を計画した。担当教員との事前打合せにおいて、人前での発表、常に発言が求められるグループ活動が難しい等が想定されることを伺い、参加生徒に対して事前の活動周知（レクチャー動画の視聴）等を行い、取組のイメージや見通しを持って参加できるように工夫したほか、体験活動重視のプログラムとし、無理のないように要所で思考を促すこととした。参加生徒が書いた感想には、「地域のことに興味をわいた」といった地域への興味関心が高まったとする記述、「友達や大人と会話をして自信がついた」等、今回の合宿をとおして実感した自身の成長を記述する感想もあった。上述のとおり、参加生徒にとって満足度の高い取組となった。学校実情の詳細な把握とプログラムの工夫により、広域通信制高校を対象に、満足度の高いオリエンテーション合宿を実施できた。

○自然体験活動の楽しさと探究的な学びを両立させた取組ができたこと

今回、学校側の行事実施の大きなねらいは、野外体験活動をとおして親睦を深め、学校生活への意欲付けとすることであった。そのため、体験活動の楽しさを損なわないように配慮しながら、探究のサイクルを回せるように工夫する必要があった。体験をとおして「茅」や郷土資源の魅力を存分に体感しながら、「茅の利活用方法を考えよう」といった思考を促す問いかけ、そして、利活用アイデアの一覧共有、担当教員の指導のもとで自分の高校生活や進路と関連付けてアイデアを再考する場面も要所に入れたことで、自然体験活動の楽しさと探究的な学びを両立させた取組にすることができた。

〔課題〕

●多様な校種の参加促進

全国的な傾向として地域探究プログラムの参加校は、公立校、全日制が多い。本当の意味で、高校生体験活動顕彰制度としていくには、私立校、定時制通信制等の高校生も参加できるように広報することが求められる。その意味で、広域通信制高校サポート校であるトライ式高等学院がオリエンテーション合宿の実施に至った意義は大きい。加えて、全国にキャンパスを展開するサポート校であり、他施設でも同様の取組が実施できるように事例を共有していきたい。

状況写真



茅場散策し、茅の生態系を説明
（講師：茅葺き職人 磯和氏）



茅葺き工法や茅の利活用を学ぶ



エコな「茅ストロー」づくり



「茅コースター」づくりも体験



かまどで郷土食「南部せんべい」づくり



体験をとおして茅の利活用を考える

事業実施報告

開催日	令和7年1月26日(日)		
事業名	全国高校生体験活動顕彰制度「地域探究プログラム」 地方ステージ		
開催場所	東北工業大学 八木山キャンパス	参加人数	28名
参加学校名等	岩手高等学校プログラミングコース 福島県立光南高等学校		
関係機関名	(後援) 岩手県教育委員会 福島県教育委員会 宮城県教育委員会 東北工業大学		

状況報告 (事業の内容・事業の成果と課題について記載)

〔事業の内容〕

東北各施設でオリエンテーション合宿(以下OR合宿)を修了し、実践活動を行った高校生のうち、書類審査の結果、グループ部門7組、個人部門1名が地方ステージに出場した。探究の成果を発表するとともに県外高校生と交流を通して親睦を深め、互いの取組について意見を交わした。今年度の東北ブロック地方ステージは、東北工業大学(宮城県仙台市)を会場に、東北ブロックでは初めての外部会場での開催となった。大学がもつ充実した学習環境の中で、高校生が伸び伸びと発表を行うとともに、高校生同士が意見交流することをとおして、新たな気付きと学びを得る機会を提供できた。

〔成果〕

○大学がもつ充実した学習環境のもとで開催できたこと

今回、東北各施設の間地点として仙台駅近郊の東北工業大学を会場に地方ステージを1日開催としたことで、参加者の負担軽減を図りつつ、大学がもつ充実した学習環境を体感する機会を提供できた。引率教員からは「会場が大学というのも生徒にとってよい経験になった」との感想が寄せられた。会場の東北工業大学からは後援ならびに発表の場をご提供いただいたほか、大学公式ウェブページでも地方ステージ観覧の案内をしていただいたことで、一般観覧を希望する問合せがあり、本事業について広く周知することにもつながった。

○高校生同士が意見交流する場を提供できたこと

実践活動の発表だけでなく、評価委員からの質問意見に先立って、高校生同士が質問や意見を考え、質疑応答ができるように、コミュニケーションゲーム(早口言葉でボイストレーニング)を行ってアイスブレイクを図ったり、「いいねカード」を用意し、そのカードに感想を記入したりする仕組みを取り入れた。このことにより、緊張がほぐれ、どの発表でも高校生が発言することができた。さらに、発表後にふりかえりの場として交流場面を設けたことで、参加した高校生全員が互いの発表に対する感想を述べたり自分の高校を紹介したりすることができていた。高校生の感想には、「自分自身の成長を感じた」、「意見交換で自分が考えていなかったような意見を聞いた」といった学びを実感する記述が多くあったほか、「発表に関しての意見交換も充実したものだ」、「こういうプログラムがあるのは高校生にとってありがたい」といった本事業の有用性を記したものもあった。

〔課題〕

●地方ステージのエントリー条件の緩和

東北ブロック地方ステージと冠した事業にもかかわらず、参加校数が2県2校にとどまる状況にあり、とりわけ個人部門は1名のみでの発表に留まった。事業に対する満足度は100%であったものの、「とても良い事業だが、参加校が少ないのがとても残念」(引率者)との声もあった。例えば、地方ステージのエントリー要件であるOR合宿修了に関わらず、実践活動があればエントリー可能とする「オープンエントリー」制を導入する等、エントリー条件を緩和することで、多くの高校生が参加できるようにしてはどうか。

●外部会場での開催にあたっての入念な準備とバックアップ

初めての外部会場での開催となったため、事前下見や打合せを行ったほか、豪雪等により参加者の会場入りが困難な場合を想定し、バックアップ用のオンライン会議ツールの開設も準備した。今後も同様の対策は必要と思われる。また、参加校だけでなく、本部派遣の評価委員にも本件を共有し、交通機関不通の場合に備える。

状況写真



会場の東北工業大学



探究の成果を発表



賞状授与



高校生同士の質疑応答



評価委員からの助言・講評



記念撮影(参加者全員)